明治天皇〔6〕

山岡荘八歴史文庫

山岡荘八歴史文庫91

定価はカバーに
表示してあります

明治天皇〔6〕

山岡荘八

© Wakako Fujino 1987

昭和62年 6 月 8 日第 1 刷発行
昭和62年 8 月 8 日第 2 刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)

印刷——凸版印刷株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。 〔文二〕

Printed in Japan

ISBN4-06-195091-6 (0)

江苏工业学院图书馆
藏书章

山岡荘八歴史文庫
91

講談社

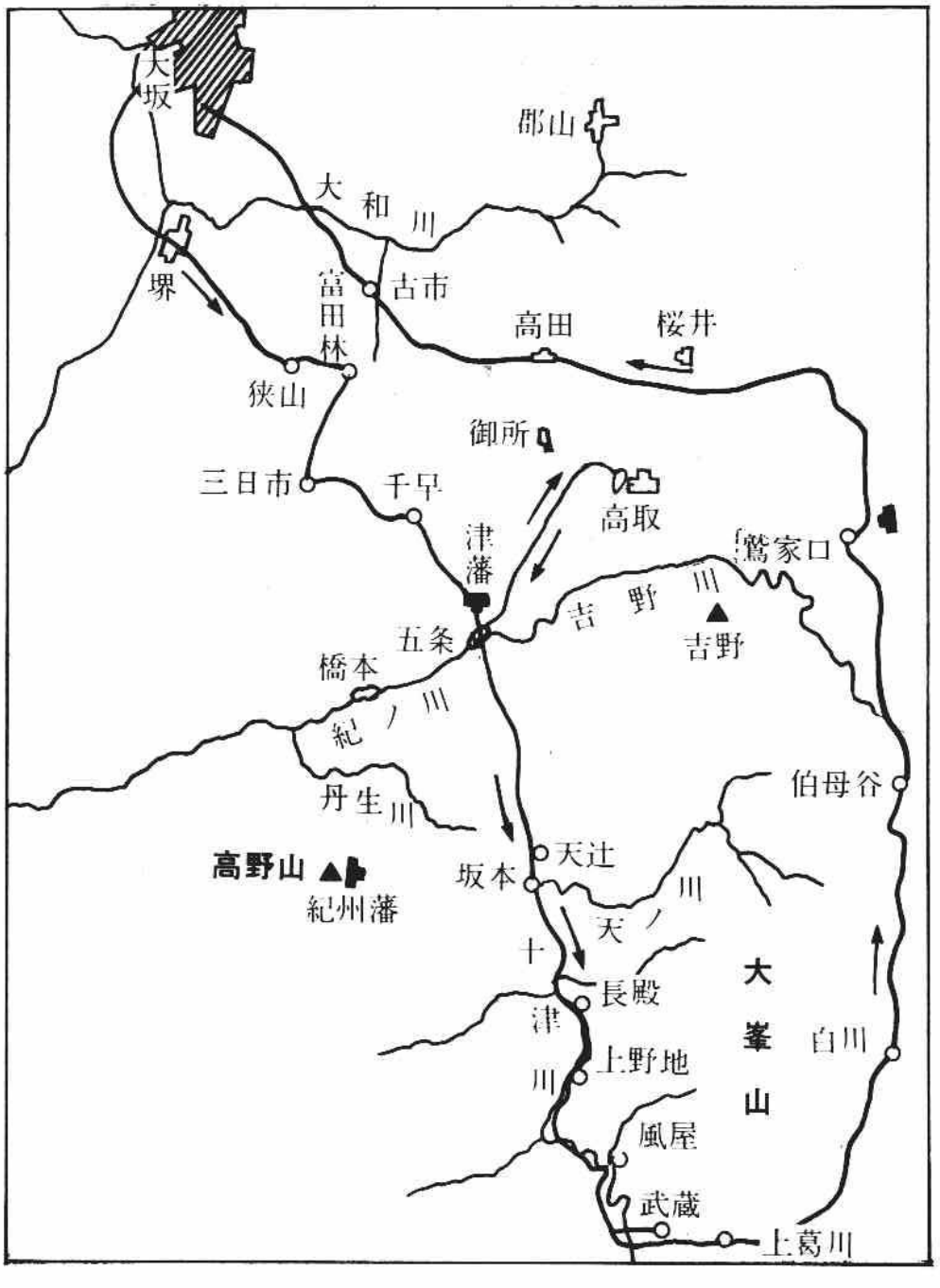
装丁・辻村益朗
装画・村上　豊
挿絵・三井永一

目次

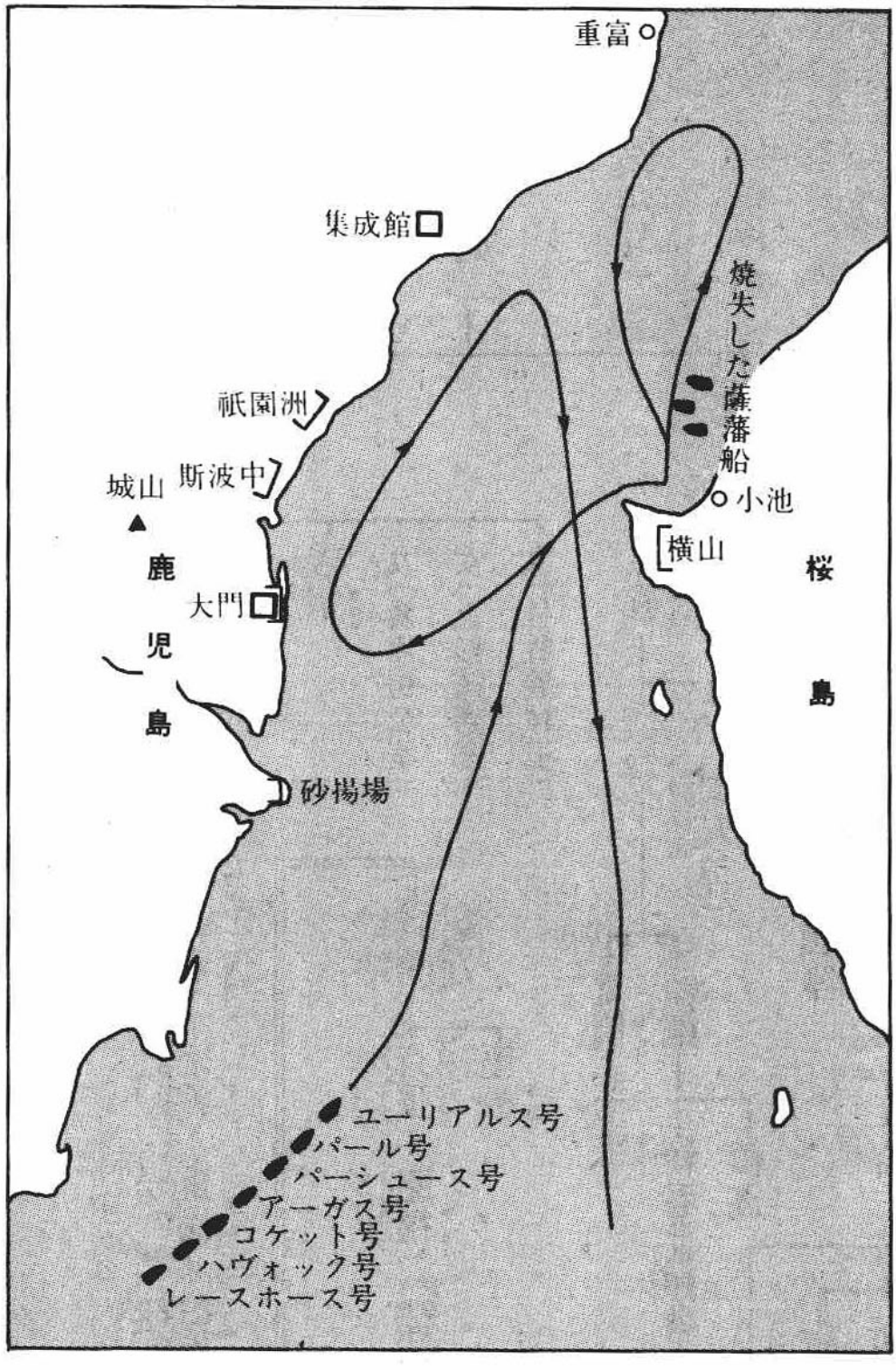
関連地図・系図　四
明治天皇〔6〕孝明帝崩御の巻(下)　七
明治天皇関係年譜　二八二

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

天忠組の乱（文久三年・一八六三年）

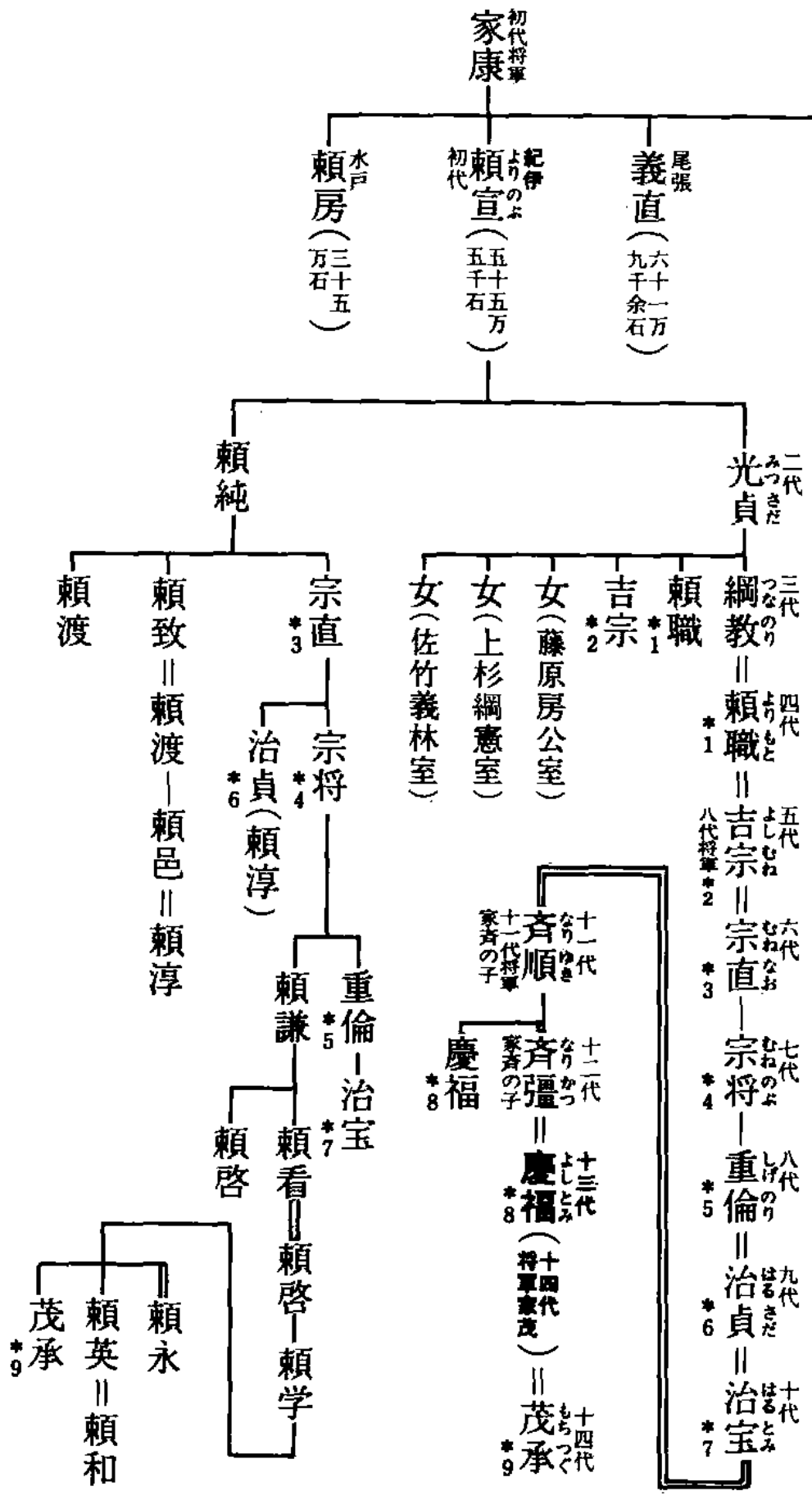


薩英戦争（文久三年・一八六三年）



] は砲台

紀伊徳川氏系図（—は直系或いは直系編入の別の明らかでないもの。＝は同族・異族よりの編入）



明治天皇〔6〕

孝明帝崩御の巻(下)

意地に捧ぐる

まったくそれはわずか十分間か、十五分間の差であった。十五分後であったら、支度のできあがっていた志士たちは、そろって寺田屋を出発してしまっていたに違いない。

歴史は、時おりこうした皮肉な「時差――」を織り込んで、人間の運命ばかりか、世の中の歯車までも狂わせてゆく……

まさに出発しようとする寸前に、島津久光の派遣した二隊の探索者が、寺田屋の前でバッタリ出あっていたのだ。

いずれもそれぞれの嗅覚の限りを働かせて嗅ぎ当てたところがこの寺田屋だったらし

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

い。

「うん、まだいるぞ。よし、おれが行く」

まっ先に申し出たのは奈良原喜八郎であった。奈良原喜八郎は喜左衛門の弟で後の男爵繁である。彼は、暴発寸前の有馬新七を説き伏せ得るのは自分だけ……と、信じてまっ先に立った。

「よしッ、おいどんらも！」

道島五郎兵衛と、江夏仲左衛門、森岡善助が続いて寺田屋の土間に入った。

「いや、造作をかけるの。有馬、田中（謙助）、柴山、橋口（壮助）の四人に面談したいのだ。呼んでくれぬか」

出て来た亭主の伊助にそう言って、奈良原喜八郎はニコリと笑った。

緊張した顔を見せては取り次ぐまいと思ったからだ。

「あなた様は？」

「仲間だ。奈良原喜八郎だと言ってくれ」

「しばらくお待ちを……」

亭主の取り次ぎで有馬を先頭にして四人が二階からおりて来た。

奈良原はいよいよ落ち着いた声で言った。

「諸君は今すぐ錦小路のお邸へ来てくれぬか。和泉公（久光）がご心配なされてお待ちなのだ」
「なに、今すぐ……それはならぬ」
まっ先に有馬新七が首をふった。
「ほう、どうしてそのような頑なことを言うぞ」
「われらは只今、粟田宮のお召しによって参るところだ。ご用の済んだ後ならまかり出よう。それまでは参れぬ」
奈良原はいっそう声をおとした。
「諸君は、わが君命を聞かぬつもりか」
「何と言われようと、宮のご用の相済むまでは、残念ながら戻れぬ」
「ほう、すると諸君は宮のご家来か？　そうではあるまい。君命にそむくとどうなるか考えてのうえか」
「何と言われようと、今すぐに参る気はない。わかっているであろうが」と、田中謙助。
「何と言われようと……すると、上意討ちも苦しくないと言うのだな」
「おお苦しくないッ」

とうとう有馬新七は癇癪玉を破裂させた。と、間髪を容れず、
「上意！」
わきから道島五郎兵衛が、田中謙助の眉間に一刀浴びせかけた。当時の武士にとって「上意！」は絶対の重みを持つ。躱せば躱せる田中謙助だったが、彼は躱そうとしなかった。真っ向から頭を割られて眼球は飛び出し、そのままその場に昏倒した。
「上意！」
続いて、あとから入って来た山口金之進が、謙助のわきに立っていた柴山愛次郎の肩先へ斬りつけた。
「そうか、上意討ちか」
肩へ一刀浴びて、柴山愛次郎はよろよろと前へ泳いで、そのまま倒れた。
「上意討ちとならば……謹しんで刃を受けよう。決して……手向かいはせぬ」
その時、有馬新七は、田中謙助を斬った道島五郎兵衛とはげしく二、三合わたりあっていたが、どうしたはずみか彼の刀がポッキリと折れた。と、その瞬間、彼は体ごとたきつけるようにして道島に組みつき、はげしい闘志で壁ぎわに押しつけた。
押しつけてはみたものの、自分は素手で相手は抜き身、とっさに新七は唇をゆがめて叫んだ。

13　孝明帝崩御の巻（下）

「刺せッ！　おれごと刺せッ」
有馬新七が吠えるのと、駆けつけた壮助の弟橋口吉之丞が、
「おう！」
と、答えて大刀を突き出すのとが同時であった。
「二人とも許せ！　許してくれよ」
刺しながら吉之丞は口走った。道島五郎兵衛と有馬新七は組み合ったまま壁に縫いつけられ、橋口が刀を抜くとそのままずるずると床に崩れた。
すべてがあっと言う間の出来事で、二人を刺した橋口吉之丞のそのあとのつぶやきが哀しかった。
「何と言うこと！　もう四人が死んどるばい」
無理もない、みな肝胆を照らしあったはずの親友同士なのだ。
犠牲はまだそれだけでは済まなかった。
森山新五左衛門は階下の厠を出て来て、はじめてこの場の騒ぎを知り、いきなり副刀の鞘を払ったためこれも討たれた。
「何だ何だ。どうかしたというのか？」
二階の階段近くにあって階下の騒ぎに気づいた弟子丸龍助、橋口壮助、西田直五郎の

三人は、何気なく階段を降りて来て、いよいよ殺気立っている討手のため、抵抗らしい抵抗もかなわぬうちに斬られてしまった。

それでもまだ階上ではほとんどの者が気づいていない。

「これはいかん！」

奈良原喜八郎は諸肌(もろはだ)ぬいだ。人を斬るためではない。彼はそのまま二階へかけあがると、両刀をみんなの前に投げ出して坐った。

「みな聞いてくれ！　おれはこうして、皆が聞かぬとあれば切腹する気だ。よいか。有馬君らは、君命にそむいたゆえ、やむなく上意討ちにした。しかし諸君に対しては、もとより敵意のあろうはずはない……君命なのだからご一同は、すみやかにここを出発して京にゆき、まず第一に君前に出て貰いたいのだ……」

大広間に残っていた人々は、これではじめて事態を知り、騒然として起(た)ち上がった……

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com